



サイの小さなギータ

神と生活を共にする時、その回数や規模は問題ではありません。その人が神と共に数秒いようと、数年いようと関係はありません。その人が「神の前にいた」という事実だけで救われるには充分なのです。この点から言うと、サティヤ ギータは、天国にいる天使たちでさえうらやむ存在でした。

それは、わずか九年という短い一生でした。しかし、サティヤ ギータには、多くの魂が何百年、いや何千年の苦行をしたとしても成し得ない、バガヴァン シュリサティヤ サイ ババ様の蓮華の御足のもとで、神聖な時を過ごす機会が与えられたのです。



スワミの小さな象は、2013年1月22日の早朝、この世での衣を脱ぎ捨てました。正確に言えば、それは霊性の道を辿るのに最適な吉兆の時間、ブラフマムフルタ（午前3時から6時）が始まったばかりの午前4時20分でした。日付はインドの伝統において大変霊的で神聖とされる期間、ウッタラーヤナの最初のエーカーダシー（月相11日目）でした。

偉大な聖典『マハーバーラタ』によれば、自分の人生の終わりの日を選ぶことのできる恩寵を授かったビーシュマでさえ、肉体を脱ぎ捨てる時期として、このウッタラーヤナを選びました。もし、息の引き取り方や状況がその人の人生を物語るのだとすれば、サティヤギータの一生は恩寵に満ちたものであったに違いありません。



1メートルほどの、この小さなサティヤギータがプッタパーティにやって来たのは、2007年のことでした。プッタパーティに到着した時でさえ、サティヤギータは、数ヶ月前に亡くなったスワミのペットの象、サイギータの魂を見たいという帰依者たちの大きな期待に直面しました。

サイギータの一生は「スワミとの無比の愛」を物語る一生であり、すべての人はどうにかしてサイギータを取り戻したいと願っていました。サティヤギータはその答のように見えました。

サティヤギータは元々その名前ではありませんでした。幼いころ、サティヤギータはラクシュミーと名付けられていました。しかし、スワミがこの子象を見るために

プラネタリウムの後ろの象小屋を訪問された時、スワミは懐かしそうに、愛を込めて、「ギータ・・・ギータ・・・」と呼ばれたのです。そこで自動的に命名式が行われ、ラクシュミーは彼女の「主の御名」であるサティヤと、姓は神に仕えるどの象にもふさわしい「ギータ」という名前を頂くことになりました！

スワミは7月21日にこの子象を訪れ、サトウキビと果物を与えられました。それ以来、サイ ギータによって守られて来たすべての催しの行列を先導する地位は、この小さなギータが受け継いだのです。



2007年7月21日 初めてスワミが子象を訪問される。

ブリンダーヴァンの大学のヴェーダ グループのメンバーである、M. G. ナンダゴパールさんは懐かしそうに語ってくれました。

「ヴェーダを唱える学生たちは、サティヤ ギータからもらった特別な思い出を持っています。それはプラシャーンティ ニラヤムのある催しの時のことでした。その時は、ヤジュール マンディール（寺院）から楽隊だけがスワミを先導することになっていました。私はいつものように期待を込めて、ヴェーダ隊も先導行進に参加するチャンスがあるかどうか聞いてみましたが、答えは否定的なものでした。夜の10時頃、スワミがサティヤ ギータに行列の先導を望んでいらっしゃるという電話を受け取りました。ということは、ヴェーダ隊もギータのエスコートとしてそこにいなければなりません。ワーオ！ 私たちはスワミからこのボーナスチャンスをもらってくれたサティヤ ギータに、何度も何度も感謝しました！」



スワミの小学校の児童たちのように、小さなギータもとても愛らしく、無邪気で子どもっぽい性格を持っていました。そして毎日、ブラフマ ムフルタの時間に一日の日課が始まります。日課は、運動、祈り、遊び、食事などからなっています。ギータの傍には、ペッダ レッディーさんが一日中付き添っていました。レッディーさんはスワミの象であるサイ ギータ、そして、サティヤ ギータの面倒を見ることに一生を捧げて来ました。小さなサティヤ ギータの日課を写したビデオをご覧ください。このビデオは、ヤジュール マンディールにおいて、私たちのスワミも夢中になってご覧になりました。スワミはこの「スワミの四本足の小学生」を見て微笑んでいらっしゃいました。



(上記の写真をクリックしてください。動画にリンクしています。)

まさにエネルギーの固まりであるサティヤ ギータは、年老いた世話係にも若さをもたらしめました。ペッダ レッディーさんが悪戯なサティヤ ギータと一緒に道路を走り、ギータの耳を捕まえて命令に従わせようとする姿がしばしば見られました。しかし、ある日ギータはびっこを引き始めました。レッディーさんはギータが怪我でもしたのではないかと心配になりました。



調べてみても、何も見つかりません。それでも、ギータはびっこを引いていました。サイ ギータの面倒を見ていた時の経験から、レッディーさんは何か問題が起きた時はスワミのところに急いで行くべきことを知っていました。しかし、その時はスワミにお会いできる機会が非常に少ない時期でした。レッディーさんはどうしたら良いものか考えあぐねました。その時、現在はセントラルトラストの理事であるラトナーカール氏（スワミの甥）がやって来て「スワミがサティヤ ギータの具合が悪く、びっこを引いているとおっしゃって、一番良い医者治療を受けさせるようお金を下さいました」と言いました。

帰依者が神を呼ぶ時、神は聞き入れて下さると言われています。これは、動物の世界も含まれているのは確かです。サティヤ ギータは、初期の幼年性関節炎を患っていました。しかし、時を得た行動のお陰でギータはすぐ元気になりました。それから間もなく2週間に一度の木曜日は、ほとんどいつもギータはヤジュール マンディールの建物の塀の内側からスワミのダルシャンを受ける特権を与えられました。しかも、ギータはスワミが病院に入院される前、ダルシャンを受けたごくわずかな帰依者の一員だったのです。

その日、スワミはギータに果物やご馳走を与え、優しくなでてヴィブーティを与えられました。スワミはこれが肉体を持って顔を合わせる最後の時だをご存知でした。そして、おそらくギータもそれを知っていたのでしょう。

今日、サティヤ ギータは愛するスワミと一つになるため、大急ぎで逝ってしまったかのように思えます。肉体を脱いだギータの身体上の診断は、24日間便通がなかったことから来る腸閉塞でした。ハイダラーバードとチェンナイから来た獣医は閉塞した箇所を探しましたが、明解な答えは得られず、手術に踏み切ろうかと思案している時、ギータは医者たちに微笑みかけたようでした。

獣医の一人は、象は30日以上便通がなくても生きていける動物だと言いました。ですから、医学的にはまだ治療することは可能でした。しかし、偉大なビーシュマのように、この若いギータも、この吉兆な日の吉兆な時間に去ることを決めていたようでした。

私たちに出来るのは、このギータの魂が主と一つになったことを祝うことだけです。神と共に過ごすために生まれて来たような一生は、まさに恩寵です。サティヤ ギータが短い一生の間に多くの人々の心を虜にしたことは、この「永遠にサイの小さなギータ」の最後の姿を一目見ようと、果物や花を手に集まった何十人もの人々からうかがい知ることが出来ました。

— ラジオ サイ チーム

ラジオ サイ ジャーナル2012年1月号より抜粋

http://media.radiosai.org/journals/vol_11/01JAN13/05_krishna_geeta_sathya_geeta_sathya-sai-babas-elephant.htm